

「日本におけるケミカルバイオロジーの新展開第189委員会」
設立総会議事録

- ・ 日 時：平成27年4月10日（金） 16:00～18:30
- ・ 場 所：弘済会館 4階「萩」（設立総会）
- ・ 出席者：日本学術振興会 浅島理事 西川監事 京藤監事 研究事業部木村部長
研究事業課小島課長 小林産学協力係長
穴澤委員(バイオインダストリー協会) 井本委員(慶応大) 上村委員(神奈川大)
岡部委員(東大) 長田委員(理研) 掛谷委員(京大) 亀井委員(星薬大) 川岸委員(静岡大)
菊地委員(大阪大) 木村委員(エーザイ) 品川委員(第一三共 RD)
清水委員(クミアイ化学) 新家委員(産総研) 鈴木委員(大鵬薬品)
副島委員 (代) 石崎氏(ロート製薬) 袖岡委員(理研) 永野委員(住友化学)
巾下委員(小野薬品) 水島委員 (代) 福島氏(日本たばこ) 山崎委員(カルビー)
由井委員(ファンケル) 横田委員(アステラス) 平野事務局(理研)(記録)

1. 設立総会

委員長選出まで 児島研究事業課長により進行された。

(1) 独立行政法人 日本学術振興会 浅島理事よりご挨拶

我が国の社会、経済の発展には世界競争力が必要であり、そのためには学会・産業界の連携による基礎・応用・開発研究に進めることが重要となっている。

日本学術振興会では発足の翌年の1933年より産学協力活動を進めており長い歴史をもっている。さらに昭和58年より学会・産業界からニーズのある課題について研究開発専門委員会を設置している。本委員会は、研究開発専門委員会としての活動を経て、本年、産学協力研究委員会として設置が認められた。化学物質を出発点として複雑な生命現象を解明するというケミカルバイオロジーの研究により医薬、農薬、食品、安全性評価技術への応用を目的とする委員会であり、日本学術振興会としても円滑な委員会活動に協力し、第189委員会の成果に期待している。

(2) 委員紹介

産学協力研究委員会「日本におけるケミカルバイオロジーの新展開第189委員会」委員名簿

に従い出席委員挨拶

(3) 委員長選出

初回会合であり事務局より推薦

「日本におけるケミカルバイオロジー研究新展開」研究開発専門委員会委員長として3年間活動、本年2月の産学協力総合研究連絡会議における本委員会の設立発起人代表である理化学研究所 環境資源科学研究センター 副センター長 長田 裕之委員が委員長に選出された。

長田委員長就任について承認 (以後の委員長により議事進行)

(4) 委員長挨拶

研究開発専門委員会として3年間ケミカルバイオロジーの調査研究を行ってきた。今年度より新たに産学協力研究(第189)委員会として委員の皆様と活動を行いたい。

(1)「日本におけるケミカルバイオロジーの新展開第189委員会」の設立趣旨(長田委員長)

- ・委員会の構成について

専門委員会で産業界、学会より、それぞれ 15 名の参加により運営活動してきたが、189 委員会では企業からの委員が増えて 20 名となった。[資料 1]

穴澤委員は産業界を代表する立場として、バイオインダストリー協会からの参加であること、但し、予算措置上は学界委員と同じとすることを承認した。

設立趣旨 [資料 2]について以下のとおり説明された。

- ・ケミカルバイオロジー研究の背景

化学を出発点として生命現象をとらえる研究領域で、産業界にとっても重要な学問である。特に医薬品業界では低分子の化合物の生理作用の解析が新薬の創成につながる、さらに、この委員会では医薬のみでなく、農薬、機能性食品といった広い分野への波及を対象とする。

- ・技術の現状

分子生物学においては DNA シークエンサーが多大な革新をもたらした。これと同じく、ケミカルバイオロジーの発展につながる技術要素を把握し、将来展望を行うことが必要である。

- ・アジア、欧米における公的創薬支援と我が国のケミカルライブラリー

アジアでは中国、韓国、台湾がケミカルバイオロジーの振興に注力し、大規模なケミカルライブラリー、スクリーニングセンターを構築している。

アメリカはケミカルバイオロジーの先駆けであり、BROAD 研 NIH など大規模な施設がある。ヨーロッパにおいてもイギリス、ドイツなど研究拠点ができている。

我が国においても化合物ライブラリーの構築は急務であったが、東大、産総研、理研という拠点が整ってきたが、今後はこれら拠点をどのように活用するかが我が国のケミカルバイオロジーの発展に重要である。

- ・委員会の研究課題

委員会は今後 5 年間の活動を通して、世界および我が国のケミカルバイオロジー研究の動向調査、我が国独自の生理活性物質発見力の維持向上、産業界の課題把握とさらなるケミカルバイオロジーの普及・啓発、次世代のための新技術検討、産学研究協力体制の構築を進め、さらには、日本を拠点とするケミカルバイオロジー研究について提言をまとめた。

- ・活動方針

年 4 回の定例研究会を開催し、年 1 回はケミカルバイオロジーの普及啓発のための講演会を企画する。

研究者間の交流、委員会に参加する研究機関の協力体制、支援体制を構築する。

- ・ケミカルバイオロジー第 189 委員会の目標

他の産学協力委員会にはない、ケミカルバイオロジー第 189 委員会の存在意義をアピールする活動を行う。

前専門委員会の 3 つの提言を受けて

○技術基盤の構築（研究分野を発展させる技術基盤を検討したい）

○人材育成（日本の大学にはケミカルバイオロジーを専門とするところが少ない、研究領域の発展のため 委員会からも若い人に情報を発信したい）

○ネットワーク(産学、研究組織の壁を越えたネットワークを構築したい)

(2) 幹事等の選出

委員会全体では委員数も多いので委員会開催内容・講演会講師など活動方針等を幹事会で検討したい。幹事は学会委員と産業界、産業界では医薬、農薬、食品の各分野のバランスを勘案して幹事候補 10 名が推薦された。

